令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 道祖土 小学校 ）　　学校番号　０３０

【様式】

目指す学校像	○明るく、活気のある学校　○美しい環境で、仲よく学べる学校　○保護者・地域に信頼される学校

重点目標	
	１　学びの自律化・個別最適化・探究化の達成に向けた授業や学習指導の改善
	２　豊かな心と生命尊重意識を育む教育活動の継続
	３　安心・安全な教育活動と教育相談体制の強化
	４　コミュニティ・スクールの推進に向けた理念・方策の共有と行動
	５　教育課題に対して一人ひとりが資質を向上させ、Well-being の学校を実現する組織力の向上

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和６年２月１６日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査では、すべてにおいて平均正答率が全国・市を上回っている。読書習慣に関しては平均より下回った。 ○市学習状況調査では、概ね良好な結果であるが、４教科すべてにおいて、平均を下回っている領域が見られた。 ○児童は学習に落ち着いて取り組んでいる。基礎学力や表現力については個人差が大きい。 〈課題〉 ○児童のつまずきを把握し、そこから指導方法を工夫改善して学力向上策に取り組んでいく。ドリルパークやスタディサプリ等による基礎学力向上のための学習を、朝の時間帯に位置付けることが必要である。 ○一斉型の座学中心の授業から、ICT の活用を取り入れたｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞ型の課題解決の授業への質的転換が一層必要である。「教師が教える授業」から、「子どもが自ら気付き、学びとる授業」にしていくために、必要感のある課題解決・対話・協働を取り入れた授業づくりをメインにしていく。 ○探究的学習については、学年の発達段階に応じて、児童が主体的に課題に取り組み、他者と協働して発信していく学習スタイルを確立させたい。	・基礎学力、読解力の向上	①学力向上ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ学校訪問を実施し、本校の課題解決に向けた具体策を共有し、より効果的な指導方法の工夫改善を図る。 ②基礎・基本の徹底を図るための一手段として、朝自習や日々の授業、家庭学習で、ﾄﾞﾘﾙﾊﾟｰｸ・ｽﾀﾃﾞｨｻﾌﾟﾘ等を積極的に活用する。 ③児童の読解力の課題等を、全国学力・学習状況調査等から明確にし、学習指導の改善を図る。あわせて読書活動の充実を図る。	①学力向上ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞを踏まえて授業改善の視点や手立てを設定し、それらを取り入れた授業実践を全教員が行っているか。 ②児童の学習状況や学習評価等から、各教科の基礎・基本を習得している結果が見られるか。 ③さいたま読解力向上プロジェクトに示すように、ICT を活用して探究的な読みを育成する授業改善の視点や手立てを設定することができたか。	①市教委の指導者を招聘し、学力向上ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ学校訪問を実施した。本校の実態を踏まえた授業改善の視点と改善の手立てを全教員で確認した。 ②基礎・基本の定着については、ドリルや個別の課題を授業や家庭学習で継続できている。学年の児童の発達段階等に応じて、ICT も効果的に活用している。 ③探究的な読みを育成する授業改善は、学校全体として一貫した研修体制はできていない。	B	○児童のつまずきを把握し、そこから指導方法を工夫改善して学力向上策に取り組んでいく。 ○ドリルパークやスタディサプリ等による基礎学力向上のための学習の位置づけを明確にして教育課程を進めることが必要である。 ○令和４年度まで本校で継続している読解力向上についての研修会を、来年度は研修計画に位置付けて行う必要がある。	○読書習慣の低さが気になる。 ○社会の状況が大きく変わり、教育も変わってくることで、先生方の負担も増えているだろう。 ○子どもの中での ICT に関わる様々な格差が出てくるだろう。それに対応するために先生の負担が増えるだろう。 ○家庭学習に対する学校と家庭の共通認識がほしいと思う。本当に子どもが家庭学習に取り組んでいるか、チェックは家庭を巻き込むことも大切だと思う。
		・学びの自律化・個別最適化・探究化に向けた授業改善	①「学びのポイント」（じしゃク）を活用した授業実践を年間１回以上取り組む。 ②個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させた授業づくりの研修を行う。 ③探究的な学びや PBL（問題解決型学習）への理解を深め、児童の発達段階に応じて、教科横断的な問題解決学習を単元に組み入れ、探究的な学習のスタイルを確立させる。	①全教員が「学びのポイント」に沿った公開授業を１回以上実施し、学校評価教員ｱﾝｹｰﾄで肯定的回答が 90%以上になったか。 ②よい授業のｱﾝｹｰﾄや学びの指標（試行版）で、すべてのｸﾗｽの肯定的な回答の割合の平均が目標値と同等以上であったか。 ③学校評価教員ｱﾝｹｰﾄで「児童とともに探究的な学びを実践することができた」と回答する割合が９０％以上達成できたか。	①全教員がﾀﾌﾞﾚｯﾄを活用した授業を日常的に実施しており、学校評価教員ｱﾝｹｰﾄで「公開授業を１回以上実施」は８１％で、「ICT を活用したｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞ型の授業を積極的に行っている」の肯定的回答は８０％であった。 ②よい授業のｱﾝｹｰﾄの肯定的な回等の割合は、概ね目標値を達成できた。 ③探究的な学びの実践に関する教員ｱﾝｹｰﾄでは、肯定的回答は６７％であった。	B	○「学びのじしゃク」の授業実践を確実に行い、一斉型の座学中心の授業から、ｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞ型の課題解決の授業への質的転換が一層必要である。「教師が教える授業」から、「子どもが自ら気付き、学びとる授業」にしていくために、必要感のある課題決定・個別最適・対話・協働を取り入れた授業づくりを実践していく。 ○「学びの指標チェックリスト」に即した授業改善を行う。 ○探究的学習については、学年の発達段階に応じて、児童が主体的に課題に取り組み、他者と協働して発信していく学習スタイルを確立させたい。	
2	〈現状〉 ○ペア学年による交流活動が再開し、上学年の児童の活躍が見られる。 ○学校課題研究で、３・６年生の生命の安全教育研究授業が実践できた。 〈課題〉 ○子どもの発意を取り入れた活動や、合意形成を図る力を高める活動を意図的に行う必要がある。	・特別活動を中心とした「他者と豊かにかかわる」心の育成	①本校の話合い活動を中心とした研究の成果を継承し、個々の発意が生かされ合意形成を図ることを目指した活動を充実させる。 ②異学年が体験を通して交流する行事を教師と児童が協同して進める。	①研究の成果を取り入れた学級活動が実践できたか。 ②にこにこﾊｯﾋﾟｰﾀｲﾑやニコニコさいど等の行事において、児童の発意を生かした取組が実践できたか	①話合い活動の充実についての教員ｱﾝｹｰﾄの肯定的回答は９４％であった。児童ｱﾝｹｰﾄ「児童会活動は楽しい」という回答は９３％であった。 ②ポストコロナにおける異学年交流をはじめとする取組の充実が図れた。	A	○本校の特別活動の研究成果を継承し、全教員が共通歩調で日々の実践を行っていきたい。 ○児童の発意を生かした行事や児童会活動等が、特定の時期に偏らないように、年間の計画の調整が必要である。	○学校はとても一生懸命やっている印象である。先生たちの様々な協力がありがたい。 ○３世代ふれあい広場や音楽会等、とてもスムーズな運営であった。異学年の交流も生まれており、思いやりの心にも成長を感じる。
		・生命の安全教育のさらなる推進	①全学年における生命の安全教育を年間指導計画に位置付け、学級活動や保健学習等の時間で確実に実践する。	①全学年において、生命の安全教育が確実に実践できたか。	①６年生と特別支援学級で生命の安全教育の授業研究を行い、成果が得られた。	B	○授業実践の蓄積をもとに、生命の安全教育の全体計画・年間計画を作成する。	
3	〈現状〉 ○理科の実験中に発生した事故を重く受け止め、再発防止に向けた環境整備・指導体制の強化・指導力向上等の研修の履修等を進めている。 ○コロナや児童を取り巻く様々な環境によるストレス不安感、生活の変化等が児童の心身に影響を与え、登校渋りや友達関係のトラブルが増加している。 ○支援が必要な児童に対して、管理職を含めた複数の教員でかかわる体制を作って対応している。 〈課題〉 ○事故防止や安全指導に関するマニュアルや指導事項等を作成し、体系的に安全教育を推進していく。安全指導・安全学習・安全管理の側面から、児童の生命を守る取組をさらに具体的にしていく。 ○生徒指導・教育相談に係る組織的な対応策を検討する際には、現状報告に加えて、あらかじめ改善策を持ち寄って、提案し合いながら協議する会議の習慣をより意識して取り組んでいく。教職員の人員や空き教室に限りがある現状ではあるが、個に応じた居場所づくりを模索し続けたい。	・児童の事故防止の徹底と、自助・共助意識を育む安全教育の推進	①授業や学校生活における事故防止についての事例研修会を年１回以上行い、教職員の危機管理意識の継続に努める。 ②指導者を招いて学校課題研究「学校安全」を進め、児童が自分事として課題解決に取組むような学習や活動の計画を研究する。	①事例研修会を計画的に実施し、道祖土小事故防止のための実施マニュアル（学校生活編・教科指導編）が作成できたか。 ②安全教育に係る授業実践・環境作り・行事等の取組の成果について、２年次の計画に照らして学校自己評価を行い 80%以上の肯定的回答が見られたか。	①事故防止に向けた教職員対象の事例研修会を行い、それ以外にも、生徒指導も含めた安全に関する研修会を実施した。また、理科の事前実験の徹底と、管理職を含めた複数教員による授業指導を行った。 ②安全教育の研究は、「デジタルマップを活用した交通安全の授業」「生命の安全教育」の領域で授業実践を行い、成果を上げることができた。	B	○事故防止や安全指導に関するマニュアルや指導事項等を作成し、体系的に安全教育を推進していく。安全指導・安全学習・安全管理の側面から、児童の生命を守る取組をさらに具体的にしていく。 ○学校課題研究である安全教育は、諸事情で年度途中に実践が滞った。日常的な安全指導も含めて組織的な研究を軌道に戻す。	○Sola ルームの理念はとても大切であると思う。学校現場の実情に照らし合わせると、職員の人手が足りないのではないか。市として支援に関わる人員を確保していただきたい。 ○安全教育の研修が計画通りにできなかったことをしっかりと認識していることが大切だと感じる。
		・安心・安全な学校づくりに向けた心のサポート体制の強化	①生徒指導・教育相談に係る校内委員会での情報共有と協議をもとに、問題の早期発見やいじめの防止を組織的に取り組む。 ②SC・SSW と連携を一層深め、児童本人や保護者の心に寄り添う相談体制を構築するとともに、困り感を抱える児童に対して、学校での居場所をつくる。	①学校自己評価の教職員のいじめ対応についての評価で、肯定的評価を維持できたか。 ②臨機応変に人員を配置したり場所を提供したりして、個に応じた支援の充実につなげることができたか。	①生徒指導・教育相談体制については、組織的対応ができているという教職員の肯定的評価が９２％である。また、「児童の様子について問題を早期発見しているか」、「個別な問題について保護者にしっかり情報提供がされているか」についての保護者からの肯定的評価はそれぞれ８３％、８６％であった。 ②個別対応に係る人員配置は、全教職員を総動員して対応しているが、人数に限界がある。	B	○生徒指導・教育相談に係る組織的な対応 ○教職員の人員や空き教室に限りがある現状ではあるが、個に応じた居場所づくり（Sola ルーム設置）を模索し続けたい。	
4	〈現状〉 ○学校運営協議会において、本校の育てたい子どもの姿についての熟議を行った。 ○80 名を超えるボランティアの方々が児童の安全の見守りに協力してくださっている。 ○PTA 本部の皆様が週１回来校され、PTA 活動を通して学校教育や児童の支援の協力してくださっている。 〈課題〉 ○学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞが CMS 化され、教職員が作成・更新できるようになったので、積極的に活用するように働きかける必要がある。 ○協働して進めていくまでには至っていないので、さらに熟議を重ね、地域と学校教育の連携を図っていきたい。教職員にもコミュニティ・スクールの現状と関わり方を明確に伝えていく。	・学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ等の活用による情報発信	①学校の取組や児童の活動の様子等及び学校運営協議会の情報を学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞで発信する。 ②校内に地域や SSN 等の情報コーナーを設置し、教職員・児童・来校者に情報提供ができるようにする。	①学校自己評価に係る保護者ｱﾝｹｰﾄにおいて、「学校は児童の教育活動の取組についての情報を積極的に配信している」の設問に対する肯定的回答が 90%以上であったか。 ②校内情報コーナーを設置し継続的に充実が図れているか。	①ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞや各種たより等で学校の情報をこまめに発信してきた。このことについての保護者の肯定的評価は９３％であった。 ②教職員や来校者に伝わりやすい情報提供コーナーの設置は十分にできていない。	B	○教育活動のこまめな情報が、保護者や地域の方に分かりやすく提供できるように、ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞの内容や頻度を改善していく。 ○PTA や地域、来校者に、本校のコミュニティ・スクールの進捗状況が分かるように、伝え方について検討をつづける。	○あいさつの習慣化については、子どもたちだけではなく、保護者も教職員もより意識が必要である。 ○地域の見守りボランティアでは多くの方々にご協力をいただいている。このことを教職員や子どもたちにもっと周知させることで、あいさつにつながるのではないか。 ○あいさつは朝より帰りの方が活発にできている印象である。地域で朝にきちんとあいさつができる子どもは全体の 20%程度に感じる。あいさつ運動のよびかけに対する反応も課題が見られる。 ○PTA の行事に教職員がもっと参加できるとよい。土曜授業とからめたい。
		・道祖土小コミュニティ・スクールの具体的な活動の策定と行動	①ふるさと意識の醸成と、校訓「明るく　仲よく　たくましく」の具現化に向けた学校・家庭・地域の連携について、熟議を重ねる。 ②子どもたちのために、学校・家庭・地域が協働してできる取組を実施する。	①育てたい子どもの姿を具現化するための具体的な方法について熟議し、協働に向けた方向性を示すことができたか。 ②学校・家庭・地域で協働した行事を複数実施できたか。	①ふるさと意識の醸成、校訓を具現化した子どもの姿等を熟議して共通認識できた。 ②PTA や育成会、地域の自治会等の積極的な行事の実施のおかげで、学校と地域や PTA 等の連携を図ることができた。	B	○学校運営協議会でさらに熟議を重ね、地域と学校教育の連携を図っていきたい。教職員にもコミュニティ・スクールの現状と関わり方を明確に伝えていく。	

5	〈現状〉 ○３０代以下の教員が２５人おり（７０％超）、５年以下の教員は１４人いる。年齢構成がピラミッド型である。 〈課題〉 ○学級によって授業における ICT の活用に格差が見られる。１時間の授業に ICT を活用することが日常的に行われることが、教育の今日的課題であることを意識し、授業改善に努めていかなければならない。 ○年齢やｷｬﾘｱを問わず、教職員が互いに尊重し合いﾒﾘﾊﾘのある働き方ができるように、ﾎﾞﾄﾑｱｯﾌﾟを重視したい。 ○校務分掌によって仕事量に偏りが生じないように運営を工夫する必要がある。	・学校職員一人ひとりがプロ意識と実力を発揮して協働する Well-being な環境づくり	①ｴﾊﾞﾝｼﾞｪﾘｽﾄを中心に、ICT を活用した授業づくりや指導力の向上について学ぶ研修会や情報伝達の機会を定期的に設定し、スキル等の向上を目指す。 ②教職員がそれぞれのｷｬﾘｱや特性（よさ、こだわり、持ち味等）を理解し合い、協働する環境作りや研修体制となるように、教員相互の OJT を実践する。 ③面談等を通して、対話に基づく研修受講奨励を行う。	①ﾀﾌﾞﾚｯﾄを活用した授業を実施するために、ｴﾊﾞﾝｼﾞｪﾘｽﾄを中心に教員の ICT 技能が授業改善に役立てられる状態になったかについて、学校評価の教員の肯定的な回答が 90%以上であったか。 ②働き方改革・業務改善・教職員の Well-being （居場所・やりがい）について、学校自己評価の教職員の肯定的回答が 90%以上であったか。 ③受講奨励により、教員が資質向上に向けて取り組むことができたか。	①ｴﾊﾞﾝｼﾞｪﾘｽﾄを中心に、ICT 活用に関する研修が計画的に進められているが、教職員の実績として、ICT の授業に関する肯定的な評価は 80%に留まった。 ②学校衛生委員会で業務改善や教職員の Well-being に関するｱﾝｹｰﾄ調査を行い、成果や課題を集約することができた。業務負担の偏りに関して課題を感じている教職員の割合は、６０％であった。 ③個々の教員が、キャリア Navi に基づいた目標や研修計画を立てて、自らの資質向上に向けて取り組んでいる。	B	○ICT を活用した授業の実践については、さらに教育の今日的課題を踏まえて、より個別最適な学習と協働的な学習の内容を取り入れていけるようにする。「学びのじしゃク」の授業実践やスクールダッシュボード等の ICT 活用における学年間差をなくす。 ○業務改善や業務負担の偏りを解決していくために、原因を明らかにして、抜本的な改革を実行する。 ○資質向上として、ICT 活用力の向上を奨励していく。		○ICT 活用がメインとなっている現代の状況を考慮し、学校課題研修の安全教育の内容も工夫が必要であろう。 ○スクールダッシュボードを教職員が毎朝見て、児童に声をかけ、保護者にも連絡することは、特に新任の教職員には難しくはないのだろうか。